

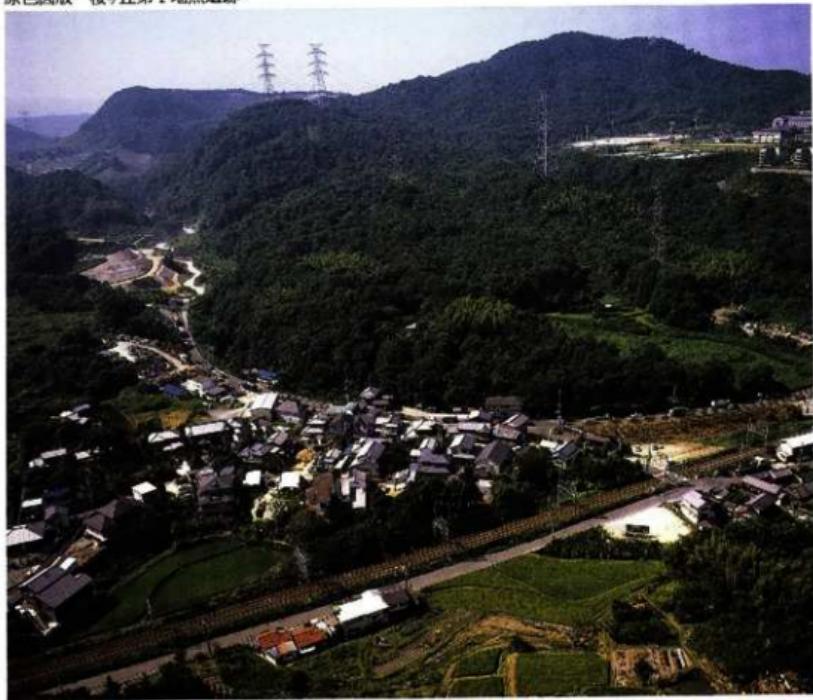
香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 11

—平成10年度—

1999

香芝市教育委員会

原色図版 桜ヶ丘第1地点遺跡



遺跡の景観（北北東から）—背後右：寺山、背後左：春日山—



地層断面（調査区南壁）

序 文

本市は、奈良県の北西部・奈良盆地の西端に位置し、奈良時代の『万葉集』にもうたわれた二上山を背に市域がひろがっています。

大阪都市圏に近接する地理的条件から、現在62,000人を超える人口を擁するベッドタウンとして発展していく、今もなお人口増加の一途をたどっています。

その反面、古くから自然環境に恵まれ、また現在まで受け継がれてきた埋蔵文化財をはじめ、各種の文化財が数多く残されています。なかでも、先史時代の人びとが利用した貴重な資源のサヌカイト原石が大量に採れることから、石器製作遺跡が多数発見されていて、この二上山北麓遺跡群は学界でも夙に知られているところです。

このたび、平成10年度国庫補助金事業の一環として実施しました市内遺跡2件の発掘調査結果をとりまとめ、その発掘調査概報を発刊することになりました。

この発掘調査を実施するにあたりまして、ご協力を賜わりました地元の方々をはじめ、その他関係者の皆さんに深く感謝を申し上げますとともに、この調査概報が多くの方の目にふれ、本市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただけますれば幸甚に存じます。

また、今後とも埋蔵文化財行政に邁進していく所存ですので、関係各位のよ
り一層のご指導、ご協力をお願いする次第です。

平成11年3月

香芝市教育委員会

教育長 百濟成之

例　　言

- 1 本書は、奈良県香芝市穴虫小字赤土平に所在する桜ヶ丘第1地点遺跡第10次発掘調査および同市五位堂小字八王寺に所在する八王寺古墓第1次発掘調査の概要報告書である。
- 2 発掘調査は、平成10年度国庫補助金事業の一環として実施した。いずれも、自己用専用住宅建築に伴う事前の発掘調査である。
事業名：市内遺跡発掘調査
事業者：香芝市
調査担当：桜ヶ丘第1地点遺跡＝佐藤良二（香芝市教育委員会事務局生涯学習課
二上山博物館主査）
八王寺古墓＝下人迫幹洋（同上学校員）
- 3 桜ヶ丘第1地点遺跡の空中写真撮影、基準点測量、航空写真地形測量は、株式会社アイシーへ委託した。
- 4 桜ヶ丘第1地点遺跡の現地調査において、下記の方々からご指導、ご教示を賜わった。心よりお礼申し上げる（50音順・敬称略）。
市沢 哲（樟蔭女子短期大学日本文化史料）・岡村道雄（文化庁文化財保護部記念物課）・絹川一徳（財団法人大阪市文化財協会六反事務所）・関川尚功（奈良県教育委員会事務局文化財保存課）・趙 哲濟（財団法人大阪市文化財協会六反事務所）・堀 裕（樟蔭女子短期大学日本文化史料）・松浦五輪美（奈良市埋蔵文化財センター）・松藤和人（同志社大学文学部） *所属は現地調査時。
- 5 発掘調査から遺物整理に至るまで、下記の方々の協力を受けた。記して謝意を表わす（順不同・敬称略）。
吉岡藤雄・西田長治・竹村 勝・松村繁雄・黒川 薫・高垣芳英・田中久美子・島田良子
森川 実（同志社大学大学院生）・内田陽一郎（奈良大学学生）・伊藤栄二（同）・田部剛士（同）・河村麻子（樟蔭女子短期大学学生）・奥下徳子（同）・山野邦子（同）・石井直美（同）・川本倫子（同）・楠本早苗（同）・森本之美（同）・深江千春（同）・吉岡由紀子（同）・的場絵末（同） *所属は現地調査時。
- 6 本書は調査担当者がそれぞれ執筆し、佐藤が編集した。なお、桜ヶ丘第1地点遺跡の出土遺物の実測は河村が、製図は佐藤がおこなった。

目 次

序文	（百済成之）
I 桜ヶ丘第1地点遺跡—第10次発掘調査	（佐藤良二）
1 はじめ	1
2 調査の概要	2
(1) 調査の方法と経過	2
(2) 堆積層序	3
(3) 検出遺構	4
(4) 出土遺物	4
3 まとめ	10
II 八王寺古墓—第1次発掘調査	（下大迫幹洋）
1 はじめ	12
2 調査の概要	12
3 まとめ	13

挿 図 目 次

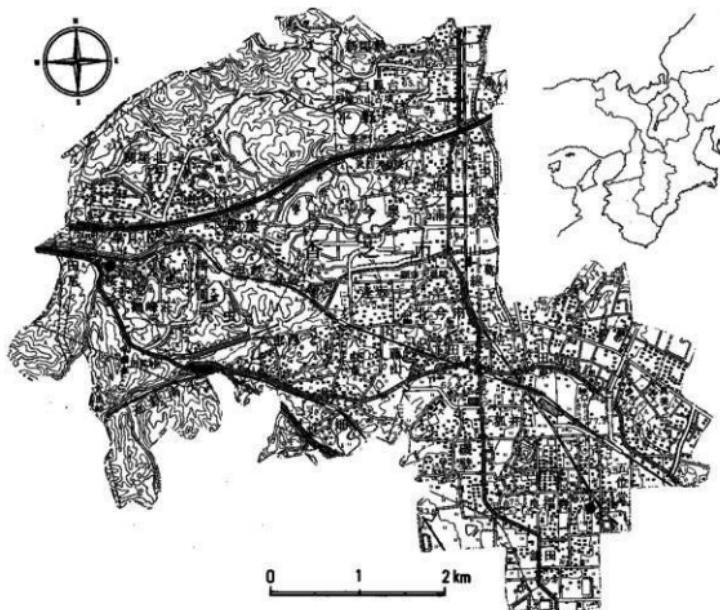
第1図 平成10年度発掘調査位置（●印）	■
第2図 調査区の位置（数字は調査次数）	1
第3図 調査区（実線）と光掘範囲（網部）	3
第4図 調査区内の土坑分布および地層断面	（折込）
第5図 山土遺物（1）	5・6
第6図 出上遺物（2）	7
第7図 出土遺物（3）	8
第8図 調査区位置図（S=1/2,500）	12
第9図 「大和国古墳墓取調書」掲載図	12

表 目 次

表1 香芝市国庫補助金事業の経過	11
------------------	----

図 版 目 次

原色図版 桜ヶ丘第1地点遺跡（上：遺跡の景観、下：地層断面）	
図版1 桜ヶ丘第1地点遺跡（1）〔上：遺跡全景、下：東区全景〕	
図版2 桜ヶ丘第1地点遺跡（2）〔上：東区の調査、下：西区の土坑〕	
図版3 桜ヶ丘第1地点遺跡（3）〔上：SK-06土器片出土状況、中：B-8区第II b層上部遺物出土状況、下：B-10区第II b層下部遺物出土状況〕	
図版4 八王寺古墓（上：発掘調査前の状況、下：調査区完掘状況）	



第1図 平成10年度発掘調査位置（●印）

No.	遺跡名	調査次数	調査地番	調査期間	調査面積
1	桜ヶ丘第1地点遺跡	第10次	穴虫3138-19	平成10年5月12日～同年9月17日	104m ²
2	八王寺古墓	第1次	五位堂109-1	平成10年5月19日～同年5月20日	32m ²

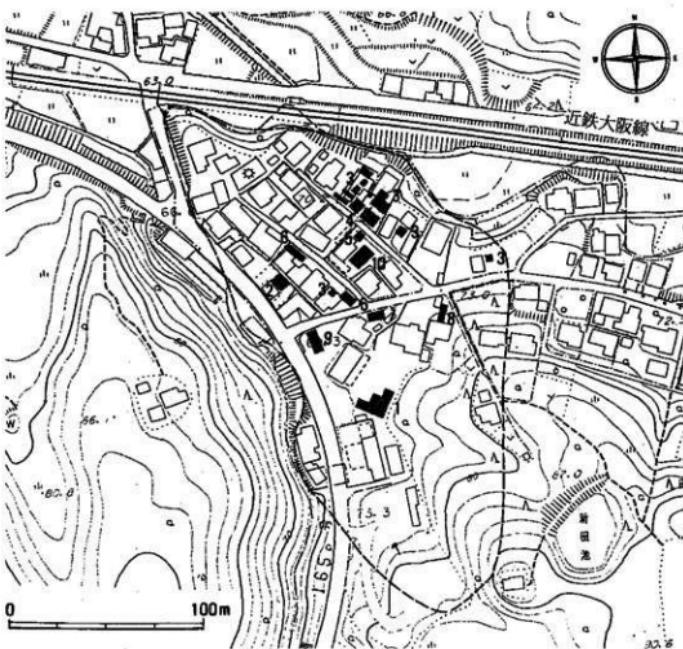
I 桜ヶ丘第1地点遺跡—第10次発掘調査—

1 はじめに

桜ヶ丘第1地点遺跡は奈良県香芝市穴虫小字赤土平（一部、小字「シリ谷」）に所在する、後期旧石器時代から弥生時代にわたって土地利用された石器製作遺跡である。奈良・大阪府県境にたおやかな姿勢をみせる二上山（雄岳517.2m・雌岳474.2m）の北麓から西麓（香芝市・太子町・羽曳野市・柏原市）にかけて分布するサヌカイト原産地・二上山北麓遺跡群内に位置する。

本遺跡は樋口清之氏によって発見され、1931年に学界へ報告された（樋口 1931）。そして、1971年に同志社大学旧石器文化談話会が再確認した（同志社大学旧石器文化談話会 1972、同編 1974）のち、1975年に最初の発掘調査が試みられた。奈良県内で初の旧石器文化の究明を目的とした発掘調査である（奈良県立橿原考古学研究所編 1979）。

その後、香芝市（当時は町、1991年10月1日市制施行）は1981年度より国庫補助金事業に着手し、当面は二上山北麓遺跡群を中心とした遺跡の範囲確認調査と自己用専用住宅建築に伴う事前



第2図 調査区の位置（数字は調査次数）

の発掘調査を実施してきた。近年は、7世紀建立の尼寺廃寺北遺跡（香芝市尼寺2丁目所在）の範囲確認調査も実施している（表1）。

本遺跡の発掘調査は1975年の第1次を皮切りに、1981年度に第2次、翌年度に第3次、翌々年度に第4次調査を、1986年度に第5次、翌年度に第6次調査を、そして1995年度に第7次、翌年度に第8次、翌々年度に第9次調査を実施し、今回の第10次調査という経過をたどってきた（第2図）。

二上山北麓遺跡群の旧石器時代の遺跡のなかでも調査次数が最も多く、近畿地方で唯一・最大規模の石器石材（サヌカイト）原産地遺跡群内の代表的な遺跡としての地位を保っている。

今回の発掘調査は、1997年12月18日づけで自己用専用住宅建築に係る発掘届出書（「埋蔵文化財発掘の届出について」）が提出されたことにはじまる。香芝市教育委員会（以下「市教委」と略す）は、翌年1月6日づけで奈良県教育委員会教育長（以下「県教育長」と略す）あてに副申した（香教博第247号）。その後、翌2月4日づけで県教育長から通知（「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」）があり（教文第2941号）、これにもとづいて施主と協議をおこない、同年5月から現地調査を実施することとなった。市教委は5月1日づけで発掘調査通知（「埋蔵文化財発掘調査の通知について」）を提出し、5月12日に発掘調査を開始した。なお、県教育長からの受理通知（「文化財保護法第98条の2第1項の規定により地方公共団体が行う発掘に関する通知書の受理について」）は、6月3日づけであった（教文第1025号）。

現地調査は同年9月17日に終了し、実働は97日間であった。その後、出土遺物の整理作業に着手し、今年度の国庫補助金事業は1999年3月31日に完了した。

2 調査の概要

（1）調査の方法と経過

今回の調査地点は第5次と第6次の調査区の間の土地で、調査区は地形（台地の延長方向）にあわせて任意に基準線を設定し、それに平行、直交する線分によって一辺1mの方眼を調査対象地に設けた。遺跡は南東から北西にのびる舌状の台地に立地しており、標高約90mから65mまでが遺跡の範囲と推定している。今調査区は約71mを測る。

南東-北西ラインはアルファベットを、南西-北東ラインはアラビア数字を付し、両者をあわせて各グリッド名とした。このうち調査をおこなったのはA-5からH-17までの104グリッド、面積104m²である。さらにこのなかで基盤まで完掘したのはほぼ55m²（第3図）で、そのほかは第II b層（後期旧石器時代遺物包含層）上面=弥生時代土坑検出面で留めた。調査区四周の壁面名称は、南西-北東ラインを北・南壁、南東-北西ラインを西・東壁とした。

調査は排土置場を考慮して、西側48m²が終了した後、東側56m²の調査をおこなった。まず、現代の整地層は機械力および人力にて除去し、その後第II b層上面を精査することによって弥生時代の遺構を検出し、遺構の調査が終了したのち第II b層以深の精査をおこなった。第II b層および第III層は遺物の出土平面位置と垂直レベルを記録し、出土位置を記録化できない碎片は1グリッド、1回精査ごとに一括してとりあげた。1回精査の掘り下げ深度は10~15cmである。この3次元的記録化をおこなったのは南壁寄りの23m²である。第IV層は出土遺物がわずかであったが、1グリッドごとに一括してとりあげた。なお、埋土の識別が非常に困難な土坑があり、第II b層以

深を精査中あるいは調査区壁面観察において土坑を確認できたことが多い。

第II b層精査中には、サンプリングエラーの比率確認を目的としてB-12グリッドの1回精査分の土壤(0.1m²)を一括採取した。また、第IV層においては石器製作に可能な大きさのサスカイト原礫の含有量を見るため、A-11～13およびB-8～13の9グリッド分(約1.8m²)を調査した。その結果、幼児頭大のサスカイト礫3点のほかはすべて拳大以下の小礫であった。

調査の最終段階において、プラスチック製の桶を用いて堆積土の柱状サンプリングを3ヵ所(A-11南壁・B-17東壁・H-12北壁)でおこない、また、ラジコンヘリコプターによる調査区および遺跡の空中写真撮影を実施したのち、調査区を埋め戻して現地調査を終えた(9月17日)。その後、翌10月に調査区位置を確定するため4級基準点測量を実施し、さらに翌年3月には本遺跡の地形図(縮尺1/500)作成のためセスナ機による航空写真測量をおこなった。

(2) 堆積層序

堆積層序は、今回の調査区が第3・4次調査D・F区および第5・6次調査区に近接しているため、基本的には相互に同一であった(第4図)。

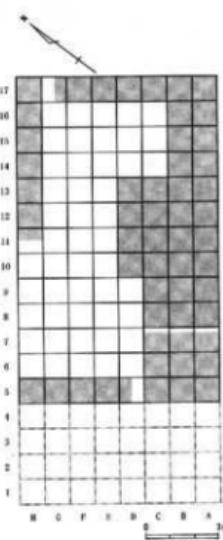
第I層 現代の客土・整地土: 層厚は50cm前後で、大きく上下に2分できる。下部は、本遺跡の基盤を形成する寺山火山岩を搬入した整地土で赤色を呈する。

第II b層 黄褐色シルト質土: シルト、砂を基調とした土壤で、少量の各種礫を混える。下位の第III層上面の凹凸が著しく、本層の層厚は約20～90cmを測る。分層が可能である。色調は上部が黄褐色で、下位になるにしたがって明黄褐色に変化する。また、礫の含有率がより多い部分と少ない部分が識別できる。本層は、後期旧石器時代の純粹な遺物包含層である。

今回の調査区では本層上部の汚染された部分(第II a層)は確認されなかった。なお、本層と第I層に挟まれて弥生時代と推定される堆積土が調査区西壁および北壁寄りに認められた。本遺跡で「弥生時代堆積土」は、はじめての確認事例である。SK-03とSK-25の切り合い関係から壁面精査においてます確認した。層相では土坑内埋土との識別がきわめて困難であるが、層の堅さはやや軟質である。土坑掘削に伴う排土が1つの層を形成したと想定している。

第III層 黄褐色礫層: マトリックスはシルト質土を基調とするが分層が可能で、礫含有率の多寡やマトリックスが砂質を帯びる部分を認めることがある。本層の上面は凹凸が著しく、層厚は約20～50cmを測る。

第IV層 灰白色砂礫層: 基盤の第V層上面の凹凸を反映して、層厚は約5～30cmを測る。基



第3図 調査区(実線)と完掘範囲(網目)

盤が不透水層（非透水層）であるため、本層が帶水層となる。

第V層 寺山デイサイト（石英安山岩）：新第三紀中新世の火山活動で噴出した寺山熔岩で、本来新鮮な部分は青みがかった暗灰色を示すが、本層上面は風化のため赤色系を呈する。ただし、白色系や黄色系を呈する部分も介在する。上位の第IV層とは、当然不整合の関係である。本遺跡北西部の基盤を形成する。

(3) 検出遺構

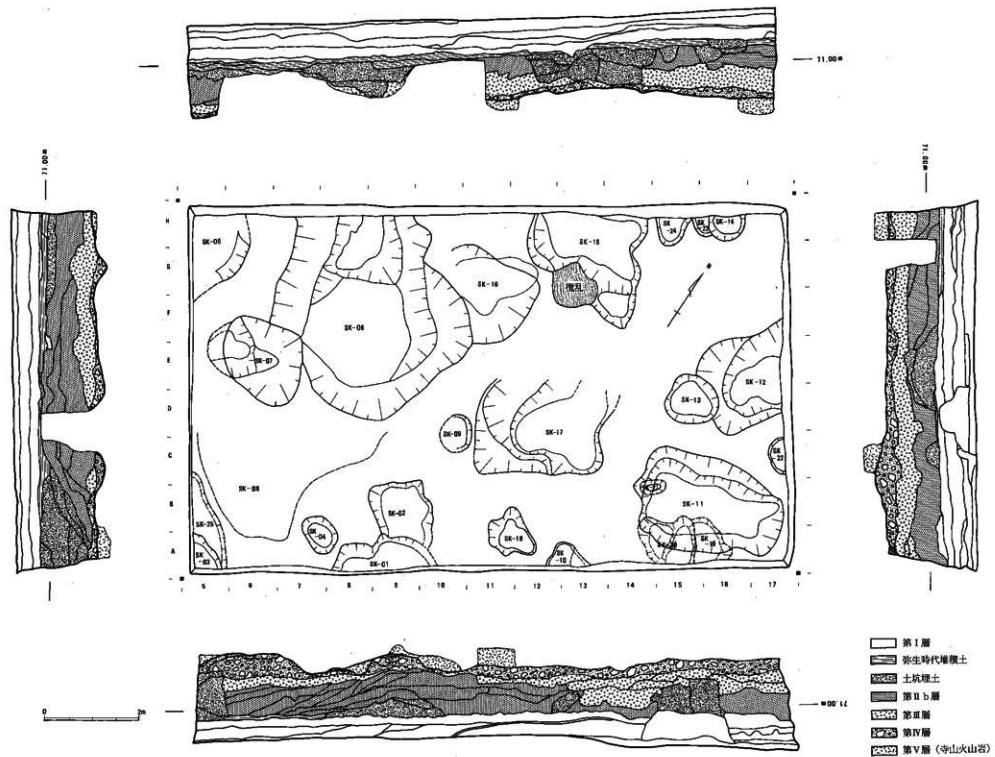
本調査区において検出した遺構は、第II b層を掘り込んだ土坑25基である（第4図）。掘り残した部分での未検出土坑を考慮すると、さらに多くが存在すると予想される。埋土は、おまかに2大別される。一方（A群）は暗褐色～黒褐色を呈して軟質で、もう一方（B群）にはぶい黄褐色系で、第II b層との識別が困難である。そのため、第II b層の掘り下げ途中や調査区の壁面精査中に確認されたりもした。A・B群の土坑はいずれも第II b層上面を掘り込み面としており（一部は「弥生時代堆積土」の上面）、また出土遺物の内容からも時期差を峻別することはきわめて困難で、いずれも縄文時代から弥生時代の所産と考えている。ただし、A群のSK-06からは器面の風化度合が新しい石片とともに槍先形石器の半成品や折損品、および弥生土器らしい數片が出土し、弥生時代と考えられる。

これらの土坑の規模、形状は一定ではない。平面形状は不整形、断面形状も捕鉢状、椀状やオーバーハングする部分もみられるなど統一性がない。規模は長径約50cm～5m以上、深度約20cm～1mほどである。土坑底は第III層に達する場合はあるが、第IV層にはほとんど届かない。上述したように、第IV層においてさえ1.8m²中幼児頭大のサヌカイト礫が3点入手できる程度である。すなわち、これらの土坑掘削において石器製作に供しうる大きさのサヌカイト礫の入手率は低いと推定されることから、サヌカイト礫の採掘坑ではないと考えられる。性格は現状では判然としないが、出土遺物の内容から石器製作にかかる土坑と想定している。

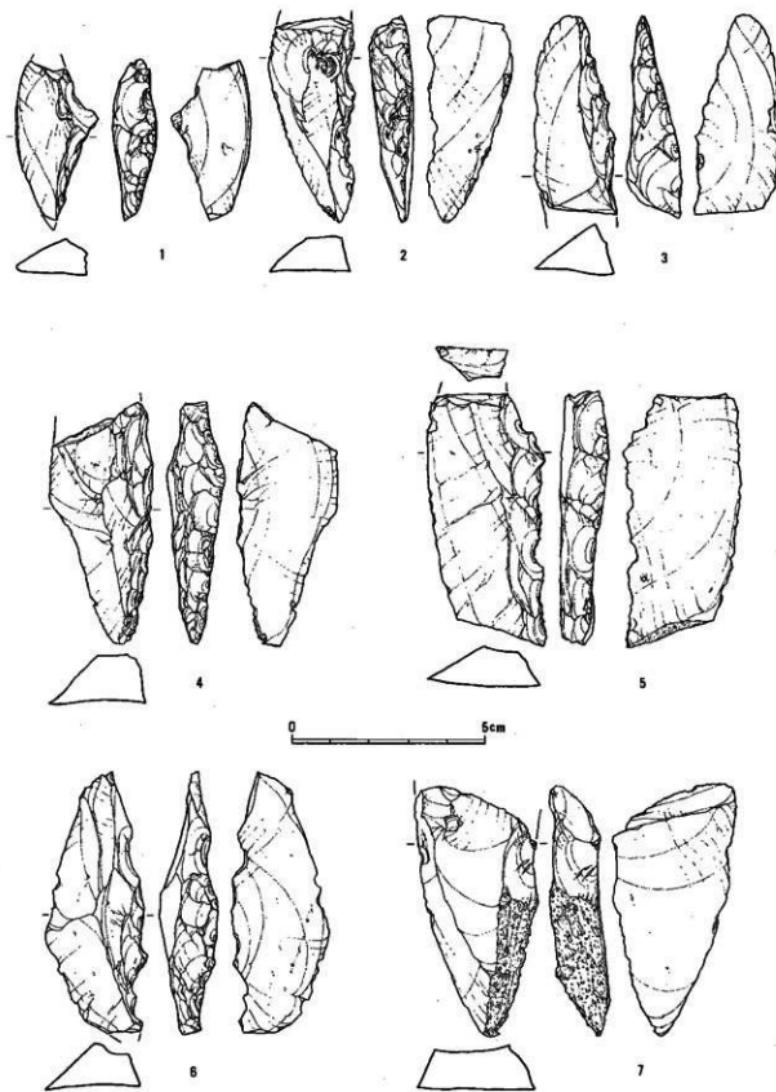
(4) 出土遺物

第II b層～第IV層の出土遺物は、サヌカイト製の石器、剥片、石核、碎片、熱破碎片などや各種礫のハンマー・ストーンである。石器はナイフ形石器、楔形石器を主とし、微量の削器、搔器が認められる。サヌカイト製遺物は瀬戸内技法を基調とした国府石器群と考えられるが、瀬戸内技法関連資料以外には、わずかに石刃技法関連資料や瀬戸内技法でない横長剥片剝離技術を示す石核がみられる。石刃技法関連資料には石刃、石刃核、石刃の末端にわずかに2次加工を施した石器（部分加工のナイフ形石器）などがある。このうち、第6図11は背面が礫面で構成される剥片の背・腹面を石核側面に、打面側を剥片剝離作業面に設定し、石核調整は素材背面側に一部施される石刃核で、備讃瀬戸型石刃技法（佐藤 1987）に類似する。また、わずかな搔器のなかには定形的でない剥片（背面は礫面で構成）の末端を弧状に刃部整形し、打面および側縁部分を背面側から器面調整を施したもの（第6図10）がある。

瀬戸内技法関連資料には第1工程の盤状剥片、同石核、第2工程の翼状剥片、同石核、第3工程の国府型ナイフ形石器が描うが、ナイフ形石器の出土量は意外に少なく、しかも半成品や折損品が多い。整形剝離は、素材剥片の打面部分を整形した1側縁加工を主とするが、わずかに刃部側も整形した2側縁加工も微量認められる。ハンマー・ストーンの石種には、サヌカイト、チャート、花崗岩、石英岩などがある。なお、ハンマー・ストーン以外ではサヌカイトのほかに数点の

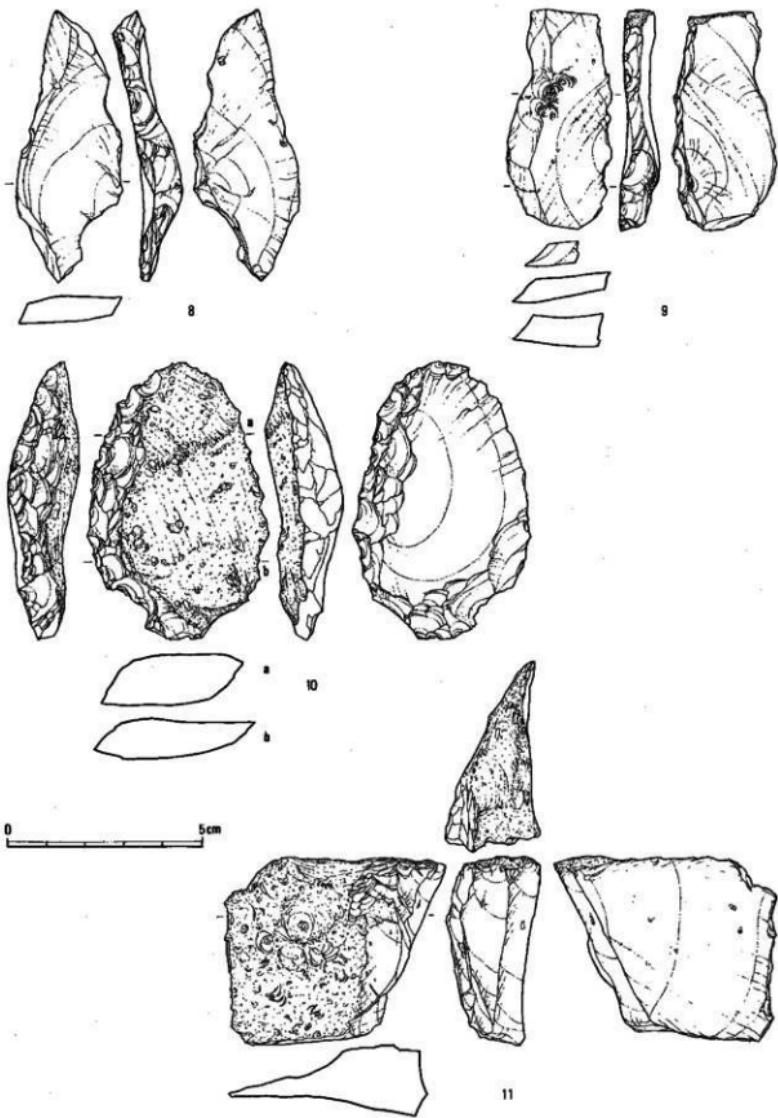


第4図 調査区内の土坑分布および地層断面



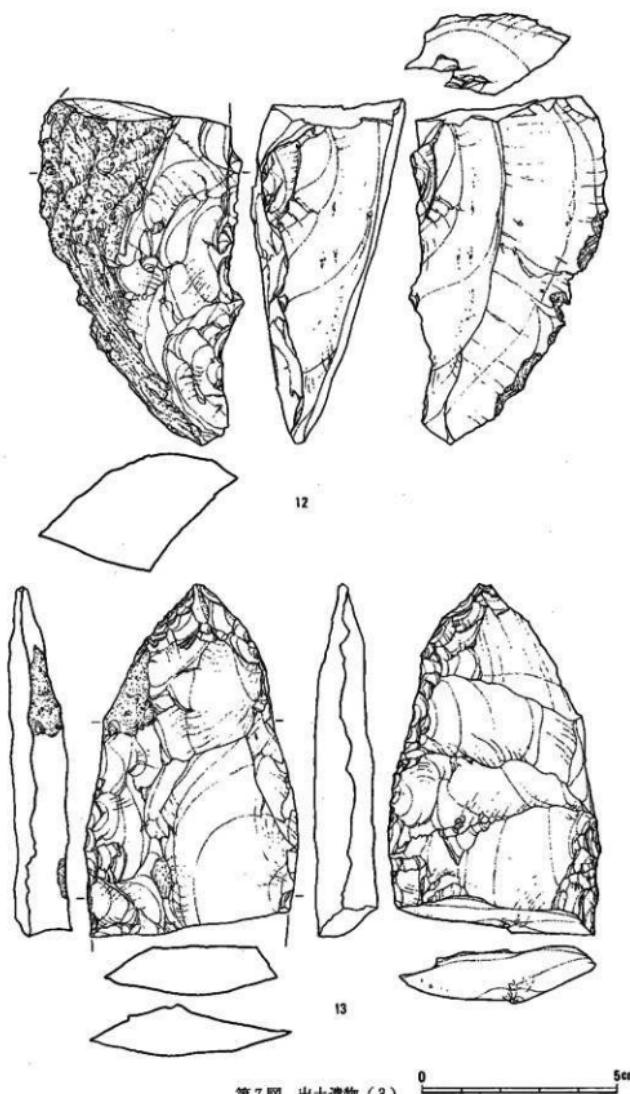
第5図 出土物（1）

1～7 ナイフ形石器（7は石刃素材）
1 SK-17、2～7 第IIb層



第6図 出土遺物(2)

8・9 刮状剥片、10 搗器、11 石刃核
8 第II b層、9~11 第III層



第7図 出土遺物(3)

12 脊状剥片石核、13 楔先形石器
12 第IIb層、13 SK-08

チャート製資料も確認された。

上坑内からの出土遺物は、第II b層などからの混入と考えられる器面の風化が進んだサヌカイト製資料のほか、風化度合の新しいものには槍先形石器、剝片、石核、碎片、熟破片などのほかハンマー・ストーンもみられる。また、SK-06からは器面が相当痛んでおり文様や調整痕は判読できないが、胎土の状況から弥生土器と考えられる土器小片が数点出土している。SK-05・21からはサヌカイト製の凹基無茎式石鐵がそれぞれ1点出土した。両面が精緻に調整された器長1~2cmほどの資料で、あるいは縄文時代に帰属するかもしれない。

槍先形石器はことごとく折損しており、しかも半成品である。おそらく弥生時代の打製石劍類と推察される（第7図13）。

3 まとめ

今回の発掘調査においての成果は、後期旧石器時代の国府石器群のまとまった資料を得たことと弥生時代の槍先形石器製作に関連する土坑を検出したことである。今調査区は第3~6次調査区と近接しており、遺跡が立地する舌状台地の中央付近における遺跡の実態を明らかにすることができる。

この舌状台地は南東部（第1次調査区周辺）を除いて、新第三紀中新世の二上層群玉手山累層形成時に寺山から噴出した寺山デイサイト（横山 1992）を基盤（第V層）とする。これを不整合に第IV層の灰白色砂礫層が被覆する。微量のサヌカイト製遺物を含むが、いずれも器面が水磨を受けており原位置は遊離している。すべて剝片で帰属時期は特定できない。この第IV層の堆積時期を推定することが今後に課せられている。

黄褐色疊層の第III層には瀬戸内技法関連資料を含み、遺物内容は第II b層と変わらない。ただし、遺物量は激減する。第II b層は黄褐色シルト質土であるが、層厚が厚い部分では下位になるにしたがって白色シルトの含有量が多くなり、明黄褐色を呈するようになる。これに呼応するかのように遺物の包含量も上部が最も多く、下位へしだいに減少する。遺物の平面分布状況は、濃淡はあるが特定の遺物集中部は視覚的には判別ができない。第II b・III層の形成は、遺跡が立地する台地の背後の丘陵（大阪層群）が供給元と推定される。大雨時において遊離した礫や土壤がきわめて小規模な「土水流」的な移動をもって徐々に堆積したとも考えられる。ただ、そこについた遺物を大規模に押し流すような流量はなかったであろうと想定している。第III層形成時には礫が多く流下する環境にあったのであろう。第II b層形成途中においても礫がより多く流下した時期もあったようである。このように、長期間にわたって徐々に堆積するなかで隨時土地利用されたため、そのときどきの遺物集中部が重なっていることからその分離は厳密には不可能であろう。

その後、縄文・弥生時代においても土地利用がされ、数多くの土坑が存在する。ただ、近年において大規模に削平をうけたようで、第II b層を直接現代の整地土が覆う。ただ、今調査においてはじめて「弥生時代堆積土」とした肩を一部に認めた。おそらく、土坑掘削に伴う堆土ではないかと想定している。

引用文献

佐藤良二 1987 「備讃瀬戸型石刃技法についての観察」『花園史学』8。

同志社大学旧石器文化談話会 1972 「大和国香芝町の先史器時代遺跡」「青陵」No.20。

同志社大学旧石器文化談話会編 1974 『ふたがみ—二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告一』学生社。

奈良県立橿原考古学研究所編 1979 「二上山・桜ヶ丘遺跡—第1地点の発掘調査報告一」奈良県教育委員会。

橋口清之 1931 「大和二上山石器製造遺跡研究」「上代文化」第4・5合併号。

横山卓雄 1992 「二上山はこうしてできた」「よみがえる二上山の3つの石—香芝市二上山博物館展示解説—」。

表1 香芝市国庫補助金事業の経過

年度	遺跡名	調査次数	事業主体	調査主体	調査担当	調査期間	調査面積	備考
S.56	シリ谷 Loc. 1	1	香芝町	香芝町教育委員会	奈良県立橿原考古学研究所	56. 6.29～ 8. 8	48 m ²	サスカイト採掘坑遺跡の範囲確認 個人住宅車場建設
	桜ヶ丘 Loc. 1 糸井城山古墳	2	"	"	"	57. 2.25～ 4. 17	24 m ²	"
		1	"	"	"	57. 3. 8～ 3. 29	117.5 m ²	糸井城山古墳 個人住宅車場建設
57	田尻峰 Loc. 2	1	香芝町	香芝町教育委員会	奈良県立橿原考古学研究所	57. 4.16～ 5. 8	21 m ²	赤生時代石器製作遺跡の範囲確認 個人住宅建築
	桜ヶ丘 Loc. 1	3	"	"	"	57. 8. 9～ 10. 1	96 m ²	"
58	糸井城山古墳	2	"	"	"	57. 12. 18～58. 1. 5	33 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
	桜ヶ丘 Loc. 1	4	香芝町	香芝町教育委員会	奈良県立橿原考古学研究所	58. 3. 8～ 6. 5	176.85 m ²	個人住宅建築
59	糸井城山古墳	3	"	"	"	58. 11. 7～ 11. 22	42 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
	鶴峯莊 Loc. 1	1	香芝町	香芝町教育委員会	奈良県立橿原考古学研究所	59. 11. 26～60. 1. 11	24 m ²	遺跡の範囲確認
60	鶴峯莊 Loc. 1	2	香芝町	香芝町教育委員会	香芝町教育委員会	60. 6. 14～ 8. 7	28 m ²	サスカイト採掘坑 遺跡の範囲確認 個人住宅建築
	糸井城山古墳 開闢 Loc. 2	4	"	"	"	60. 11. 5～ 12. 7	290.5 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
61	鶴峯莊 Loc. 2	1	香芝町	香芝町教育委員会	香芝町教育委員会	61. 1. 20～ 1. 22	8 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
	桜ヶ丘 Loc. 1	5	"	"	"	61. 10. 23～ 11. 21	5 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
62	桜ヶ丘 Loc. 1	6	香芝町	香芝町教育委員会	香芝町教育委員会	62. 7. 2～ 7. 22	42 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
	鶴峯莊 Loc. 3	1	香芝町	香芝町教育委員会	香芝町教育委員会	63. 11. 14～元. 2. 13	37 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
H.元	鶴峯莊 Loc. 2	2	香芝町	香芝町教育委員会	香芝町教育委員会	元. 7. 6～ 11. 26	211.5 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
	童ヶ谷 糸井	1	香芝町	香芝町教育委員会	香芝町教育委員会	2. 9. 10～ 11. 30	87 m ²	遺跡の範囲確認 個人住宅建築
3	尼寺魔寺(北)	1	香芝市	香芝市教育委員会	香芝市教育委員会	2. 8. 20～ 8. 23	28 m ²	尼寺魔寺(北) 個人住宅建築
	尼寺魔寺(南)	2	香芝市	香芝市教育委員会	香芝市教育委員会	3. 12. 3～ 4. 2. 10	135 m ²	尼寺魔寺(南) 個人住宅建築
4	藤ノ木丁	5	"	"	"	4. 11. 3～ 5. 1. 9	300 m ²	藤ノ木丁 個人住宅建築
	桜ヶ丘 Loc. 4 蘿山	1	香芝市	香芝市教育委員会	香芝市教育委員会	5. 3. 5	12 m ²	蘿山 個人住宅建築
5	蘿ノ木丁	4	"	"	"	5. 8. 11～ 8. 12	20 m ²	蘿ノ木丁 個人住宅建築
	尼寺魔寺(北)	8	"	"	"	5. 9. 16～ 9. 25	60 m ²	尼寺魔寺(北) 個人住宅建築
	尼寺魔寺(南)	4	"	"	"	5. 10. 31～ 11. 9	60 m ²	尼寺魔寺(南) 個人住宅建築
	孤井	10	香芝市	香芝市教育委員会	香芝市教育委員会	5. 11. 26～ 6. 3. 4	126 m ²	孤井 瓦屑 遺跡の範囲確認
6	開闢 Loc. 2 尼寺魔寺(北)	2	"	"	"	6. 10. 17～ 10. 18	30 m ²	開闢 Loc. 2 個人住宅建築
	8	"	"	"	"	6. 10. 19～ 10. 26	32 m ²	尼寺魔寺(北) 個人住宅建築
7	尼寺魔寺(南) 尼寺魔寺(北)	9	香芝市	香芝市教育委員会	香芝市教育委員会	6. 11. 16～7. 3. 14	214.3 m ²	尼寺魔寺(北) 個人住宅建築
	10	"	"	"	"	7. 6. 14～ 6. 23	56 m ²	尼寺魔寺(南) 塔基 自己用駐車場建築
8	尼寺魔寺(南) 開闢 Loc. 2	11	香芝市	香芝市教育委員会	香芝市教育委員会	8. 1. 30～ 3. 28	109 m ²	自己用駐車場建築 塔基 遺跡の範囲確認
	3	"	"	"	"	8. 9. 6	10 m ²	個人住宅建築
8	桜ヶ丘 Loc. 1	8	"	"	"	8. 10. 12	5 m ²	個人住宅建築
	尼寺魔寺(北)	12	"	"	"	8. 10. 15～9. 3. 26	170 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
9	尼寺魔寺(南) 孤井	13	"	"	"	9. 1. 24～ 1. 25	24 m ²	糸井城山古墳 個人住宅建築
	15	"	"	"	"	9. 1. 27～ 1. 28	7.5 m ²	孤井 個人住宅建築
9	尼寺魔寺(北)	14	香芝市	香芝市教育委員会	香芝市教育委員会	9. 11. 4～10. 3. 26	310 m ²	北・東面回廊 遺跡の範囲確認

II 八王寺古墓—第1次発掘調査—

1はじめに

八王寺古墓は、香芝市東南部の五位堂集落外れの熊谷川西岸沿いに立地する墳墓状の構築物である。

当古墓は、明治26年の野瀬龍潜による『大和國古墳墓取調書』(秋山編 1985)に記された葛下郡五位堂村大字五位堂字八王寺所在の古墳墓と比定され、古くから地元の人々に墳墓や宝物出土伝説などのさまざまな伝説と憶測をもたれていた(第9図)。

同書によると、墳墓状隆起の規模は、高さ四尺周囲十二間、すなわち、高さは約1.2m、面積は約22m²とほぼ現状どおりの規模であることが記されている。

旧葛下郡五位堂村には、この八王寺古墓をはじめ大字瓦口字土山や大字瓦口字三上五瀬、大字瓦口字猿松、大字瓦口字御坊ノ中、大字瓦口字南鈴山と称する箇所で合計6つの墳墓状隆起箇所が記されており、それに対応する古墳や墳墓状の構築物が比定されているが、古墳か否かは別として不明確なものが多く、いずれも八王寺古墓以外は所在の確定する墳墓は少ないのが現状である。

周辺の遺跡としては、北西約500mには縄文時代の集落遺跡として著名な狐井遺跡や墳丘全長約140mの古墳時代中期末の大型前方後円墳である狐井城山古墳が所在する。

また、当地は江戸時代に五位堂村に集住した五位堂鑄物師による寺院の鋳鐘を中心とした鋳物産業が栄えた地域として知られており、奈良県内をはじめ全国各地に五位堂鑄物師の作品が残されている。五位堂鑄物師のおもな作品としては「國家安康」で有名な京都方広寺の梵鐘があり、市内の五位堂十二社神社境内には日本でも希少となった銅鉄燈籠や銅鉄鳥居がある。

当調査地は現在、「八王寺古墓」として周知の埋蔵文化財包蔵地として認知されている墳墓状の構築物の隣接地であり、墳墓状の構築物や周濠状遺構の広がりなどを把握するうえで重要視された地域である。

2 調査の概要

発掘調査は、自己用住宅建築のため平成10年4月15日づけで事業者から発掘届出書が提出され



第8図 調査区位置図 (S=1/2,500)



第9図 「大和國古墳墓取調書」掲載図

たことに起因する。当地は現況では墳墓状隆起箇所および周濠の範囲外であったが、周濠状遺構の一部が調査対象地まで広がっている可能性があることや建物基礎埋設に伴う地下遺構に与える影響が懸念されることからとくに周濠の有無確認を主眼として発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、古墓に接する開発事業対象地域北側に幅4m×長さ8mの東西方向の調査区を1ヵ所設定して重機と人力による発掘調査を実施した。

調査区の基本層序は、下記のとおりである。

第1層	暗灰色砂質土層	(層厚20cm) (現代の耕作土)
第2層	灰色砂質土層	(層厚10cm) (現代耕作土の床土)
第3層	暗灰色砂層	(層厚10cm) (中粒砂混)
第4層	灰褐色砂層	(層厚15cm) (細粒～中粒砂)
第5層	灰色砂質土層	(層厚5cm) (細粒砂・やや粘質)
第6層	暗灰色粘質土層	(細粒～中粒砂混じり)

当調査では何らかの遺構や遺物が検出される可能性のある第6層の暗灰色粘質土層上面での遺構検出作業を実施することとしたが、各層中とも顕著な遺構や遺物は検出されなかつたため、図面作成および写真撮影などの一連の記録保存の過程を経て発掘調査を終了した。

調査総面積は32m²で、調査期間は平成10年5月19日から5月20日までの2日間であった。

3 まとめ

調査の結果、顕著な遺構や遺物は検出されず、古墓に伴う周濠は当地までおよばないことが確認された。即断は禁物ではあるが、周濠が存在しなかったことからほぼ現状どおり一辺約5m四方程度の小規模な構築物？であった可能性が強く、その規模からみて從来からの予想どおり古墳であるよりも中世以降の経塚、あるいは墳墓状の構築物である可能性が濃厚となった。

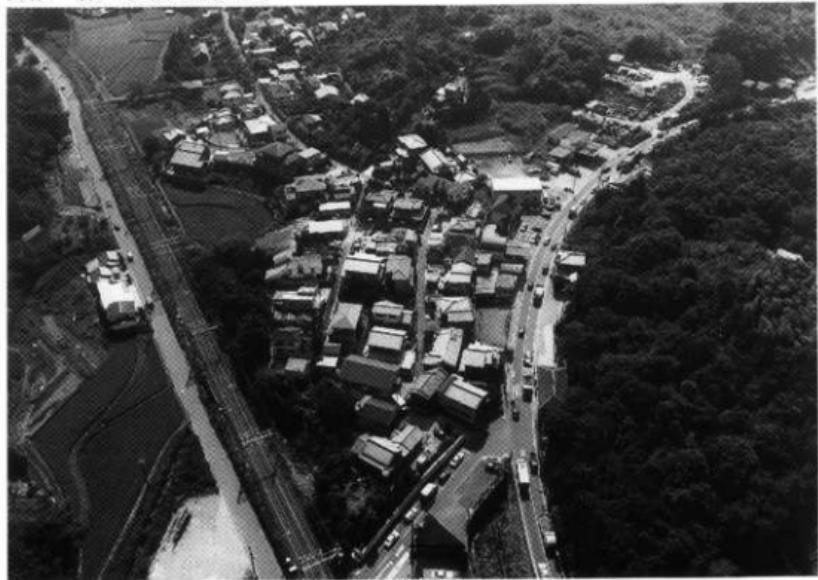
また、地理的には、層中いたるところに砂層が介在することや砂層と粘質土層が当地域の主要な地層であることから付近は隣接する熊谷川の氾濫原域である可能性が強く、現在の熊谷川の川筋が固定化した以後に築造された構築物と考えられる。

以上、関心を集めた調査ではあったが、隣接地であるため有益な考古学的情報を得ることはできなかった。当古墓の実態については機会が許されるならば、今後の墳墓状隆起箇所の発掘調査に委ねることとしたい。

引用文献

秋山日出雄編 1985 『大和國古墳墓取調書』財團法人由良大和古代文化研究協会。

図版1 桜ヶ丘第1地点遺跡（1）



遺跡全景（北西上空から）



東区全景（右側の堆土部分が西区）

図版2 桜ヶ丘第1地点遺跡（2）



東区の調査（北から）



西区の土坑（南東から）

図版3 桜ヶ丘第1地点遺跡（3）



SK-06 土器片出土状況（北から）



B-8区第II b層上部遺物出土状況（東から）



B-10区第II b層下部遺物出土状況（南から）

図版4 八王寺古墓



発掘調査前の状況（東から）



調査区完掘状況（東から）

報告書抄録

ふりがな							
書名							
副書名							
巻次							
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査概報						
シリーズ番号	11						
編著者名	佐藤 良二・下大迫 幹洋						
編集機関	香芝市二上山博物館						
所在地	〒639-0243 奈良県香芝市藤山1丁目17番17号 TEL 0745(77)1700						
発行年月日	西暦 1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 ○ ○ ○	北 緯 ○ ○ ○	東 緯 ○ ○ ○	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
桜ヶ丘第1 地点遺跡	奈良県香芝市穴虫 3138-19		34°32'56"	135°39'50"	19980512～ 19980917	104	自己用住宅 建築に伴う 事前調査
八王寺古墓	奈良県香芝市 五位堂109-1		34°31'34"	135°43'05"	19980519～ 19980520	32	自己用住宅 建築に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
桜ヶ丘第1 地点遺跡	生産遺跡	後期旧石器時代 弥生時代	土坑25基	サヌカイト製石器・剥片・ 石核・鉗片 弥生土器片・打製石剣未 成品	国府石器群（瀬戸内技法）		
八王寺古墓	その他の 墓	中世以降	なし	なし	打製石剣製作		

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 11

— 平成10年度 —

1999（平成11）年3月31日

編集 香芝市二上山博物館

〒639-0243 奈良県香芝市藤山1丁目17番17号

直 0745-77-1700 傳 0745-77-1601

発行 香芝市教育委員会

〒639-0244 香芝市本町1397番地

印刷 明新印刷株式会社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地
